

末摘花巻の成立とその波紋

一 はじめに

末摘花巻の冒頭は周知のように「思へどもなほあざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず」(小学館新編全集①二六五頁)と亡き夕顔追慕を機縁として、開巻する。この言表が、好評を博した夕顔物語を受け継ぐ宣言とすれば、読者の期待も膨らむ書き出しとなっている。

また一方で、玉鬘系主要人物の出入りの遮断はともかくとして、末摘花巻には紫の上系の書き出しとなる若紫巻との連繫を保つため、「朱雀院の行幸、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし」(①二八五頁)とあるのは、若紫巻の「十月に朱雀院の行幸あるべし」(①三三九頁)を受け、現行の巻序を破綻させず、紫の上系との融合も計られる記述として特筆できる一項であろう。さらにこの間に藤壺の宮との密通が予想される「瘡病にわづらひたまひ、人知れぬもの思ひのまぎれも、御心の暇なきやうにて、春夏過ぎぬ」(①二七七頁)や、末摘花巻巻末での二条院で紫の君と赤鼻をめぐって戯れる光源氏との対座場面は、前巻の若紫巻の内容と緊密な関係を保ちつつ成立している点も見逃すべきではなく、こうした両巻の関連が、成立論上の紫の上系と玉鬘系との分離以上に強い結びつきをもって成立してい

久下 裕利

るのうかがわせているといえよう。それを伊藤博は「末摘花巻が帚木三帖を承けつつ桐壺系列に合流する志向を有する」^{注(1)}とする。

つまり、紫の上系と玉鬘系と二系列に分離する構造がありながら若紫巻と末摘花巻はその境界に対照的に位置するに拘らず、如上のような点からして一体感があり、巻と巻との時期的連続性が保たれていて、それを成立上、同時期の創作による結果とみても大過はないであろう。

このような理由から前稿『源氏物語』成立の真相・序^{注(2)}において彰子付き女房として道長家に参仕することになった寛弘二(一〇〇五)年十二月二十九日の初お目見の時に手土産として持参したのが、この「若紫」と「末摘花」の両巻であったのではないかという推論が導かれていた。

だがそれでは何故、源氏の失敗譚が帚木三帖に続いて、しかも独立した一卷としてあえて創作され成立したのかを考えてみると、特殊な創作事情が背後にあったのだとしたら、その笑止滑稽な内容に鑑みても察しがつくように思われてくる。

二 若紫・末摘花両巻一体化成立論

前記した若紫巻と末摘花巻とを結びつける関連叙述は、周知の事実であ

り、これらを根拠にしておそらく玉上琢彌の帚木三帖発表後にその好評を得て書き継いだのが若紫・末摘花の両巻であったとする言表となったものと思われるが、^{注(3)}定かな根拠が示されている訳ではなかった。加えて島津久基の夕顔↓若紫↓末摘花をつなげる着想に、白、紫、紅と色彩の連繫を指摘できる程度にとどめおかれた事項が、^{注(4)}新間一美によって指摘された「花の顔」つながりの『遊仙窟』によって確かな脈絡となってきた。^{注(5)}もちろん白い花の夕顔は「夕暮れの花顔」という意味においても妖狐が美女に化けた唐代伝奇『任氏伝』や白楽天の『新樂府』「陵園妾」における花のように美しい容貌と儚ない運命を担う美女と造型が呼応し合うのは、言うまでもなく、^{注(7)}いかにも物語に底流する漢詩文的素養の開示が人物造型や文脈構成に脈打っていた証といえよう。

もっとも若紫巻における「花の顔」は、「奥山の松のとぼそをまれにかけてまだ見ぬ花の顔を見るかな」(①三二頁)と北山の聖が詠む光源氏賞賛の歌中であって、これは明らかに光源氏を指している。そして、「夕暮のいたう霞みたるにまぎれて」のかいま見で紫の君を見出し、その宿縁の出会いを置き去りにせざるを得ない意中を祖母尼君に伝える源氏の歌「夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ」(①三三頁)の「花」は紫の君であった。

こうして見る、見られるの二者の関係性は夕顔巻においては、白い扇に書かれていた贈歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」(①一四〇頁)の「夕顔の花」が光源氏の隠喩となり、それに対する源氏の返歌「寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔」(①一四一頁)の「花の夕顔」が贈歌の女ということになる。新間氏は次のように夕顔巻に『任氏伝』の夕暮れ時における妖しい美女出現の投影を

^{注(8)}みる。

女性夕顔の方から見れば、夕暮に現れた光源氏の顔が「夕顔」なのであり、妖狐に思われもするのであった。光源氏から見ると、夕暮に出現した、夕顔の花の如き、或いは妖狐の如き女性が「夕顔」なのである。お互いが相手を「夕顔」と思う。つまり夕暮時に出現する妖狐の如しと思っていたのである。これが本稿冒頭に引用した「何れか狐なるらむ」という光源氏の発言が現れる所以なのである。

夕暮れ時に妖しく光る花の顔が女性であるとは限らず、光源氏にその比喻が当てられ表現されることにまず注意しなければなるまい。

さて、紫の君発見が洛外に山桜の咲く仙境として『遊仙窟』的空間でなされ、張文成がかいま見た崔十娘の虜になったのも「華容婀娜」(「華の^{かは}婀娜^{あだ}とたをやかにして」であったことによる。その十娘が詠んだ詩に「翠柳開眉色」(「翠の^{みどり}柳は眉の色を開き」とあるのは、もちろん夕顔巻の「白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる」(①一三六頁)に影響する表現だろう。夕暮れ時、かすかに見た夕顔の花と山桜の花との脈絡は、「花の顔」をキーワードとして『遊仙窟』『任氏伝』という漢詩文的世界でつながっていた。

一方、末摘花は、前掲したように巻冒頭に「思へどもなほあかざりし」と亡き夕顔を追慕しその再来を期待して止まない地平から、その脇役の人物設定も大式乳母と惟光に次ぐ左衛門の乳母と大輔命婦として源氏の乳母子に恋の仲介を委ねている。ところが、周知のように故常陸宮の姫君は「花の顔」とは縁遠い醜貌の女であって源氏の期待を裏切る結果となってしまう。しかもその場面形成には「貧」と「寒」をテーマとすべく『白氏

文集』巻二「秦中吟」十首中の「重賦」からの引用が明示的に支えていた。^{注(9)}
次の場面は、源氏が末摘花の醜い容貌を見顕わした雪の朝、そそくさと帰る際の情景である。

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりてさとこぼる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなと見たまふ。御車出づべき門はまだ開けざりければ、鍵の預り尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。むすめにや、孫にや、はしたなる大きな女の、衣は雪にあひて煤すすけまどひ、寒しと思へる気色ふかうて、あやしきものに火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえ開けやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人寄りてぞ開けつる。

「ふりにける頭の雪を見る人もおとらずぬらす朝の袖かな

幼わかき者は形蔽かれず」とうち誦じたまひても、鼻の色に出でていと寒しと見える御面影ふと思ひ出でられて、ほは笑まれたまふ。

(①二九六～七頁。太字は久下の所為)

末摘花巻には雪景色と粗末な防寒着に関する言及が多く、三段落に分かれる当該引用場面も、要は最後の段落で源氏の独詠から鼻の先が赤く色づいて寒そうに見えた末摘花の顔が思い出されて、苦笑する源氏を写し出すという趣向である。

昨夜からの降雪にも関わって導かれた白楽天の諷諭詩「重賦」^{注(10)}が、引歌「名に立つ末の」の「わが袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬ日はなし」(後撰集・恋二、土佐)から「袖」を橋渡しとして驚愕の結末を何とか平静に取り繕うため、逢瀬の別れ難い後朝の涙を貧苦への同情の涙にす

り替えていくのを助長しているともいえよう。貧寒に喘ぐ民衆を救うべく為政者に訴える「重賦」の一句「幼わかき者は形蔽かれず」(「幼者形不蔽」と朗誦したのは、「老者体無温」(「老いたる者は体温きこと無し」)を含め、門番の翁と若き娘の貧寒の状況を叙した上で、ていねいに「悲喘与寒氣、併入鼻中辛」(「悲喘寒氣とともに、併せて鼻中に入りて辛し」)を導いたのだと言わざるを得ない。

この場面で光源氏は「重賦」を誦しただけではなく、その精神を継いで、末摘花邸の人々に衣類を贈り良い庇護者となったとは新聞氏の言だが、玉上琢彌は「何故に、かような貧しい門番をことさらに点綴しなければならなかったのか、理解に苦しむ。」^{注(11)}と、この場面の意義を問うて、絵のために必要な物語の場面に帰して、内奥の反照性に気づかない。

しかし、一方で玉上氏はこの場面(前者)と夕顔巻(後者)との類似性を指摘することを忘れはしなかった。

① 橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。

(隨身ニ)「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、この押し

上げたる門に入りて折る。
(①一三六頁)

② うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて

白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。
(①一三六頁)

③ 御車出づべき門はまだ開けざりければ、鍵の預り尋ね出でたれば、

御車入るべき門は鎖したりければ、……鍵を置きまどはしはべりて、

(①一三五・一三七頁)

④ 翁のいといみじきぞ出で、来たる。むすめにや、孫にやはしたなる大ききの女の、衣は雪にあひて煤すすけまどひ、……

黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる出で、来てうち招く。

(①一三六―七頁。傍点久下)

④は玉上氏が「夕顔」の巻は酷暑、この巻は嚴寒。」とするのを、童の夏の衣服と翁・娘の冬の衣服との対照で「出で来」た条項として対置したが、場面設営に一連の人物たちの行動が夕顔巻を指向して、しかも昨夜の風雪時には「かの物に襲はれしをり思し出でられて」(①二九一頁)と、夕顔を廢院に伴った夜の出来事を源氏に思い出させてもいる。

事果てて、雪明りの中で見た姫君の異様な容姿は、「あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。」(①二九二頁)とその鼻が特筆され、具体的には「普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。」(同)とある。「普賢菩薩の乗物」とは『観普賢菩薩行法経』に「普賢菩薩ハ(略)化シテ白象ニ乗ル。(略)象ノ鼻ニ華有リ。(略)象ノ鼻ハ紅ノ蓮華ノ色ナリ。」とあり、末摘花の顔の色は雪も負けるほど白い上に、その鼻が高く長く伸びていて、先端が少し垂れ赤くなっているのだから、それは白象の紅の鼻のようだというのであろう。言ってみれば、夕顔の可憐で美しい「花はなの顔」とは真逆の醜い「鼻はなの顔」であったというに他ならない。

源氏はこの末摘花との出逢いを忘れようとしても払拭できない後悔の念で、後日「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつ、む花を袖にふれけむ」(①三〇〇頁。傍点久下)と詠んでいる。これは若紫巻の源氏詠「手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草」(①三三九頁)と対照で

き、摘む花の連関とすれば、紅花(＝末摘花)と紫草ともに染料となる点でも共通するが、やはり『遊仙窟』で文成と十娘が仙窟の後園で遊ぶ詩中に「叢花四に照り、紫を散じ紅を翻す」とあり、緑の草木の中で紫の花と紅の花をともに手折りたいたい花としても、それが十娘ひとりの象徴なのか、それとも別の女となるのか、文成が欲張って二人の異なる女を手に入れることとしたら、それは「紫」の女と「紅」の女ということになり、新聞氏の言う通り若紫巻と末摘花巻との対偶性に拠るということになる。^{注(12)}

前記したように末摘花巻巻末には末摘花のもとから二条院にもどった源氏が自分の鼻に紅をつけて紫の君と戯れる場面で、「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」(①三〇六頁)との発話が見える。これは平中の色好み滑稽譚を持ち出し、源氏の失敗を相対化して物語を締めくくろうとの作者の意図であろう。もちろん平中絡みの恋愛失敗譚は、その対極に『伊勢物語』の世界があった。紫の君との運命的な出会いとなる北山、小柴垣でのかいま見から『伊勢物語』の撰取は濃密で、^{注(13)}しかも藤壺との密会の余韻を『伊勢物語』の六十九段を投影して型取るとなると、紫のゆかりとしての紫の君の存在性が明確に位置づけられることになる。末摘花との関係はあくまでいまだ幼い紫の君との将来を架けた出会いとの遠近の中で、点滅するあだ花の一つに過ぎなかったといえよう。

さらに巻末には続けて、階隠はしかくしの赤く色づいた紅梅の蕾をみて独詠し、苦笑する光源氏を写し出している。その詠歌「紅の花ぞあやなくうとまる梅の立ち枝はなつかしけれど」(①三〇七頁)の「紅の花」は末摘花の赤い鼻を連想し、「紅の鼻」であるところから忌避しようとする一方、「梅の立ち枝」の「枝」は「縁」を掛けて、えにしによる(松田)運命的な紫の君との出会いと、「立つ」には「現実に顕在化して確かな存在となる」(松田)

行く末を象徴している。また「梅の立ち枝」が「なつかし」を導いているのは、この場面の冒頭に「紫の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけり」(①三〇五頁)とあり、なつかしき紅は、運命的な出会いの場となったかいま見で紫の君の「顔はいと赤くすりなして立てり」(①二〇六頁)との赤い頬の色(田中)を淵源とする。もしかしたら「梅の立ち枝」はこの立ち姿の映像の具象化だったともいえよう。

ただこの混乱する光源氏の感懐を最後の一文となる「かかる人々の末々いかなりけむ」(①三〇七頁)とどう関わるのかを問うと、「かかる人々」には『新編全集』頭注(①三〇七頁)が指摘するように紫の君を除き末摘花をはじめ帚木系の空蟬や軒端萩などを含めて理會するようだが、ここはひとまず両卷一体化成立論としては紫の君と末摘花を指しているとしたい。末摘花巻が若紫巻の〈並び〉との認識は、その概念が不安定なこともあ^{注15)}って、やはり両巻は紅葉賀巻と花宴巻との関係同様に〈対〉としてその構造を認識する方に、^{注16)}如上の指摘の結果としては落着しよう。

さて、寛弘二(一〇〇五)年十二月二十九日の宵に至って、紫式部はようやく彰子中宮にお目通りした。持参した新作の若紫と末摘花両巻は、十七歳にしてはいまだ幼い彰子にとって初々しい男女の出会いと笑いを誘う物語として関心を魅く内容であったに違いない。新しい物語の予感に充ちた若紫巻と女房間で人気のあったらしい夕顔巻の続きを装った末摘花巻は、新しい享受母体の主人である彰子の期待に充分叶う物語であったろう。

一方、作者である紫式部にとっては、父為時や亡き夫宣孝との遺児賢子(のち大式三位)と暮すかつての名邸堤第一画に閉じ込められた生活から一転して最も華やいだ今をときめく道長家への宮仕えへと一歩踏み出し、新しい創作基盤に身を置いて女房作家としての試練に立ち向かうことになっ

た。桐壺巻はそうした道長の要請に応えた最初の巻となったはずで、『源氏物語』の冒頭に据え置かれることとなる。末摘花巻の位相を確認するためにも、もうしばらく初期の物語成立過程に執着していくことにする。

三 桐壺巻の成立

『源氏物語』の起筆説には帚木巻ないし若紫巻がまず最初に書かれた巻との研究上の成立論議が存するが、それらをことごとく批判して現在ある桐壺巻の起筆をもって『源氏物語』が成立したことが最も合理的な筋道であることを力説したのは三宅清であ^{注17)}った。

例えば、桐壺巻巻末の一文「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ」(①五〇頁)を受けて、帚木巻の冒頭が「光る源氏、名のみことごとしう」(①五三頁)と始められる呼応はまさに巻と巻との連続性を保持していると言えるのだが、難を言えば桐壺巻巻末の一文は光る君の名前の由来を明示しているとは言え、後続となる帚木巻に受け継ぐため意図的に取ってつけたような一文である感は拭い得ようもない。

逆に帚木巻巻頭の「光る源氏、名のみことごとしう」が短篇の冒頭だとしたら成り立ちようがないのかと問えば、十分に成立し得るインパクトで主人公像の奥深い背景を想像し得る世界が「交野の少将」の例示とともにいっきよに拡がってくるといえよう。前節での論議を否定しかねない危惧はあるもののあえて言えば、表現上の連結は必ずしも成立順序を確定する要件とはなり得ない。

だからと言って、武田宗俊のように紫の上系十七帖成立後に帚木系十六帖が一括後記挿入されたとした場合、^{注18)}その最初の巻である帚木巻の冒頭表

現が「光源氏、名のみことごとしう」と、既に藤裏葉巻で源氏が准太上天皇の地位にまで登りつめた後に書き出されているとしたら、いかにも白々しい陳腐な表現に過ぎなくなってしまうだろう。やはり、この視点には何かが欠落しているのであり、それは作者の製作意図を物語内部徴証から推察し、創作基盤や享受母体の相違が二つの系列化とどのような関係性があるのかを考えてみる必要があるだろう。

桐壺巻が光源氏の誕生とその母桐壺更衣の悲劇的な死を描くことを中心とする物語だとすれば、その内容が十七歳の中宮彰子に献上する最初の物語として相応しいかどうかは自明のことであろう。しかも斎藤正昭が指摘するように、帚木三帖の光源氏には「桐壺」巻で語られる両親の悲恋の物語を背負った少年の面影は見えない。^{注(19)}とする桐壺巻との乖離を重視すべきで、光源氏の名称由来に基づく連結を凌ぐ内容上の齟齬が認められる。斎藤氏は桐壺巻の執筆成立を具平親王家サロン周辺を創作基盤とした帚木三帖成立後として、若紫・末摘花両巻の前に置く点が、私説とは異なるにしても、その執筆時期に関しては、道長家への初出仕（寛弘二・三（1005・1006）年十二月二十九日）以降の約五ヵ月程に及ぶ長い里居における執筆成立を考える点には首肯できる。^{注(20)}その期間には、筆者は桐壺巻だけではなく次の〈対〉となる紅葉賀・花宴両巻は少なくとも執筆成立したと考えている。

ともかく、桐壺巻は道長の要請による物語製作の嚆矢らしく、いかにも政治戦略的内容をもった物語として、長篇化する『源氏物語』の始発の巻として据え置かれることとなる。つまり、斎藤氏が、桐壺帝のモデルを一条天皇、藤壺の宮を彰子中宮、光の君を定子の遺児敦康親王とするのを故なしとしない。

式部出仕時の寛弘二・三（1005・1006）年当時、既に彰子のもとにはその猶

子となった敦康親王が居たのは、^{注(21)}円融天皇系と冷泉天皇系との皇統迭立の場合を考え、万彰子に男皇子の誕生がない時は円融系の持続のため敦康を東宮に擁立せざるを得ないとの詮子（一条母后・女院）・道長の判断によるのだろうし、目的的にも伊周復権の場合に敦康を取り込み後見役を勤めておくことが道長にとって政権保持に有利とみての判断であったのだろう。しかし、当然道長が最も優先すべきは、彰子に男皇子が誕生することであつたから、定子在世中は一条天皇の寵愛をほぼ独占していた定子への嫌がらせ以外、道長には成す術がなく、如何ともし難い状況が長く続いていたが、^{注(22)}今はその遺児敦康が彰子のもとに居ることで、一条天皇の足を藤壺にむけることができるようになっていた。^{注(23)}そうかといって、一条天皇の関心が敦康に会うことばかりで、彰子に好意を抱くことがなければ、せっかくの藤壺への渡御が無駄となってしまうかねない。そこで要請されたのが、「好文の賢皇」（『権記』長保二（1000）年六月二十日条）である一条天皇に対して、子女の慰で終わらない物語の提供であつた。それが『源氏物語』なのである。^{注(24)}『紫式部日記』に次のような場面がある。

内裏のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」とのたまはせけるを、……
(二〇八頁)

この場で女房に読み上げさせている巻が、「いづれの御時にか」と始まり醍醐・村上朝を準拠とし、「長恨歌」「李夫人」を踏まえる桐壺巻とは特定し得ないが、一条天皇が、国史に通曉している作者であることを看破する慧眼の持ち主であつたことにむしろ着目したい。さらに天皇の傍には中宮彰子が居ることをあらためて認識させたのは清水婦久子であり、『源氏

物語」がしっかりと二人の仲を取り持っている証左とした。^{注(25)}

一条天皇が『源氏物語』に対する所感を述べた箇所はここだけにしか記されていないので、以下は推論となるが、桐壺巻が一条天皇の心を捉えたとしたら、それは悲劇的な桐壺更衣の死であつたろう。その関係性を中関白家没落の中でむかえた定子の死(『権記』長保二(1010)年十一月十六日)と比定することができるのは言うまでもないが、桐壺更衣の造型や設定に定子ひとりのみが与る訳ではなく、延喜・天曆とした準拠の枠組みからしても村上天皇尚侍登子をはじめ花山天皇弘徽殿女御^{注(26)}祇子^{注(27)}や東宮時の三条天皇桐壺女御原子等の例が組み込まれている。^{注(28)}

村上天皇は師輔女安子中宮亡き後、故重明親王の正室であつた安子の妹登子を登花殿にむかえ入れ、朝政を怠り非難されるほど過度に寵愛した。^{注(29)}また花山天皇は、大納言為光女祇子を別格に寵遇したため、他の女たちの恨みを受け、病気で退出後、懷妊のまま急逝した。花山天皇の傷心は、寵妃を失った直後に催された「寛和元(961)年八月十日内裏歌合」(『平安朝歌合大成』)における「月」「露」「虫」の歌題で三首の御詠によって表白されている。

その三首の発想と表現が、桐壺巻における野分の段の勅使^{ゆけひ}鞍負^{あひ}命婦^{みづめ}による更衣の母邸^{ははの}弔問と桐壺帝の哀傷歌に近似することを新聞一美は指摘した。^{注(30)}

○内裏歌合

秋、夜、月、に心はあくがれて雲、居、にものを思ふころかな

萩の葉における白露、玉かとして袖につつめどとまらざりけり

秋来れば虫もやものを思ふらむ声も惜しまず音をも鳴くかな

○桐壺巻

宮城野の露、吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ (帝。①二九頁)
鈴虫、声のかぎり、を尽くしても長き夜あかずふる涙かな (命婦。①三二頁)
いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人

(更衣の母。①三三頁)

雲のうへ、も涙にくるる秋、の月、いかですむらん浅茅生の宿 (帝。①三六頁)

新聞氏はさらに同歌合で御製「秋来れば」歌に番えられた公任詠「秋ごとにとことめづらなる鈴虫、のふりてもふりぬ声ぞ聞こゆる」と右の命婦歌との対照からいっそう同歌合と桐壺巻との相似は明らかとし、「花山天皇と早世したその女御祇子とは桐壺帝と桐壺更衣のモデルとなったと考えることができよう。」と述べている。

しかも祇子の四十九日の願文には「昔李夫人之反^{注(31)}魂、尚可^{注(31)}勞^{注(31)}方士」と、「李夫人」の故事を引いて魂の行方を探し得ない実状を言い、その代案を促す。この願文は祇子の急死の経緯を復元できるとともに悲傷の表出方法の典型を示して『源氏物語』桐壺巻の先例とも成し得よう。^{注(32)}

というのは、命婦^{みづめ}参後に桐壺帝の悲傷が集約されているようで、明け暮れ「長恨歌の御絵」を見て嘆く様を、「長恨歌」の「太液芙蓉、未央柳」(①三五頁)の表現に拠りながら、「絵に描ける楊貴妃の容貌」(同)から亡き更衣の面影を慕い、玄宗と楊貴妃にならって「翼をならべ、枝をかはさむと契」(同)った無念さをかみしめざるを得なかったことが叙述されている。^{注(33)}そして、命婦の派遣が「長恨歌」にいう方士であつたかの如く、亡き更衣の形見の品(御装束一領、御髪上の調度めく物)に接して、「亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵」(①三五頁)であつたならばと、亡き更衣の魂を捜し得ないで落胆するのであつた。つまり、この場面では、表

現上は漢の武帝の李夫人というより唐の玄宗の楊貴妃を詠ずる「長恨歌」引用によっていることは明らかだが、源順の作例に「楊貴妃帰つて唐帝の思 李夫人去つて漢皇の情」(「楊貴妃帰唐帝思 李夫人去漢皇情」^{注34})とあるように、平安朝期の文人にとって「長恨歌」と「李夫人」とは一对として享受されていたことからすれば、こうした哀傷の際の詠法や願文などの表現方法は定型化されていたともいえるよう。

ただそうした相似形の中にあつて新間氏も指摘しているように桐壺更衣の男皇子誕生は決定的な相異点であつて、前記した「宮城野の」歌の「小萩」は光源氏を指して、桐壺帝が若い若宮の身を案ずる心情を表白する。

当歌の本歌として従来から「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」(古今集、恋四、六九四、よみ人しらず)を挙げるのに対し、清水婦久子は『元輔集』の「恋しくはとけてを結べ宮城野の小萩もたわに結ぶ白露」(二〇九)等を指摘して、村上歌壇における類型的和歌表現に

^{注35}

やはり解消、帰結させる。その清原元輔の歌集には、安子中宮亡き後、村

上天皇が安子を偲んで催された康保三(九六六)年閏八月十五夜内裏前裁合における元輔歌の詞書に「壺前裁の宴せさせ給ふに、……」とあり、また

『栄花物語』(巻一「月の宴」)では「月の宴」(①五六頁)とあつて、清水氏

は「この時の状況が、桐壺巻の野分の段の月の風景の構想につながつたと考えてよいだろう。」とする。桐壺の巻名の異名である「壺前裁」も命婦

帰参後の哀傷を型取る初めの物語本文「御前の壺前裁のいとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて」(①三三頁)から由来するといふよりも、『元輔集』の「壺前裁の宴」からの発想を重視しているようである。

つまり、少なくとも新間・清水両氏の指摘から、村上天皇や花山天皇時代の事例が重層的に桐壺巻の表現を支えていると言つてよいだろうし、そ

れはまた一条天皇の悲劇でもあつたはずだろう。

さて、このような検討を踏まえて、当該論考において清水氏は次のような成立に関する言及もしている。

紫式部は夫、宣孝を長保三年(1002)に亡くし、寛弘二年(1005)か三年に中宮彰子に宮仕えすることになった。おそらく、その数年の間に、若紫巻や帚木三帖などが書かれたのであろう。帚木三帖と若紫巻のどちらが先に書かれ、発表されたのか。これについてさまざまな意見があるが、桐壺巻はそれらより後に付け加えられた可能性が高い。その理由としては、桐壺巻全体に描かれた詳しい宮中行事の描写が紫式部の寡婦時代では不可能であり、宮仕えの後に書かれたと推定されること、巻全体にまとまりがなく、源氏物語全体の長編化を促すために仕立てられた感の強いこと、などが挙げられる。

桐壺巻が、若紫巻や帚木三帖の後に書かれ冒頭に据えられたという認識を示しているにも拘わらず、巻名の異名「壺前裁」を藤壺入内後の「輝く日の宮」に固執して、それらを前身として桐壺巻は一つの物語として生まれ変わったという成立事情を、この言説に続けて清水氏はさらに説くが、少なくとも「壺前裁」が彰子付き宮仕え以前の執筆だとすれば、「長恨歌」や「李夫人」に加えて、現実性を加味する本朝の後宮の例として村上天皇の安子中宮への哀傷と安子の妹登子への過度な寵愛、そして花山天皇の祇子への寵遇が、桐壺帝の更衣への偏愛とその悲劇性に近似し、史実における人物関係が物語を織り成す表現との類似性に満ちていることが、いったい誰のための、あるいは何のための物語創作であつたのかを問うとすれば、相対する具平親王家での宮仕えを前提としない清水説では桐壺巻の正確な成立事情を捉えきれないであろう。また彰子付き宮仕え以後とすれば、紫

式部から『新樂府』の講義を受ける必要のあった彰子の力量からして彰子を第一の享受者と想定するには無理があらうと思われる。

そうだとすれば、繰り返される後宮のキサキたちの過去の悲劇とともに桐壺帝の悲傷や更衣の悲哀を重ねてみるのが可能なのは、一条天皇なのであり、その一条天皇の心情に寄り添うためにも定子の遺児である敦康親王を幼い若宮の光源氏に投影させることは物語の方法として順当なのであろう。桐壺帝の哀傷とそれを慰めるために新たに投入された先帝の四の宮であつた藤壺を物語の長篇化に結びつけたのは遺児の光源氏であつたが、定子の遺児敦康親王もまた彰子の居所である藤壺において一条天皇の寵幸を彰子に向けさせる、そうした仲介が『源氏物語』に課せられていたといえよう。清水氏の前掲論考にも次のようにある。^{注(36)}

少なくとも一条天皇は、光る君と敦康親王とを重ね合わせていたと思う。一般の読者に向けて天皇家のスキャンダルを書くのではない。一般の人々を対象としない、天皇のため、后のために書かれたからこそ、亡くなった后の忘れ形見である皇子の物語にしたのだと思う。また若紫巻において幼い少女を理想の女性に育てる光源氏の姿は、ちょうど年齢差が同じ幼い彰子を一孝天皇の理想の女性に育てればよいというメッセージになったことだろう。子ができない紫の上が明石君から姫君を引き取って育てる姿は、敦康親王を慈しむ彰子の良い手本になっただろう。源氏物語は、若い一条天皇と彰子にとって、夫婦仲を取り持つと同時に、帝王教育・お后教育の最良の教科書になったと考える。

長保元(九九)年、十二歳の彰子入内時、一条天皇は二十歳であつた。同年敦康が奇しくも誕生した。二人の年齢差は八歳であつたから、若紫巻

では十八歳の光源氏と紫の君との年齢差とちょうど対応することになる。

『采花物語』(巻六「かかやく藤壺」)には一条天皇が「あまり幼き御有様なれば、参りよれば翁とおぼえて、われ恥づかしうぞ」(①三〇六頁)と戯言をいうほど、入内当初からはほ笑ましく仲の良い間柄として描かれている。

一方、二条院で暮らすようになった幼い紫の君を光源氏は無邪気な雛遊びの相手として遇する他なく、その親しく戯れる様子は若紫巻ばかりではなく、末摘花巻の巻末に例の平中ならぬ赤鼻にしておどけてみせる源氏との間柄を「いとをかしき妹背と見えたまへり」(①三〇六頁)として、両巻を一対化すべく「かかる人々の末々いかなりけむ」(①三〇七頁)と閉じることになる。清水氏の言うように、二人が出会った当初は紫の君と同じく幼い彰子だから、理想の女性に育てればよいというメッセージを一条天皇に伝える意図が若紫巻にあつたとしても、一対の片方である末摘花巻が同じメッセージのもとで創作されているとはとても考えられないだろう。末摘花巻創作の意図を次に考えたい。

四 末摘花巻のメッセージ

若紫巻と末摘花巻の両巻をその記述内容の照応によって一対の成立とみ、それらが提供される場と時期を、彰子中宮サロンへの紫式部初出時だと考えてみれば、繰り返すが、若紫巻が初々しい紫の君と光源氏との出会いという内容であるのは紫式部の新しい物語作家としての門出に相応しいようでもあり、また末摘花巻は世に好評を得た夕顔物語の続きの体裁で、その評判ぐらゐは耳にしているだろう彰子にとっても関心を損なわない設定であつたろう。

しかし、末摘花巻は、夕顔物語を産み出した基盤となる具平親王家とそ

の同僚女房たちにむけた物語としても機能する作意があったのだとしたら、前稿で検討した如く『紫式部集』に拠れば、^{注(37)}この道長家への宮仕えが、侘びしいけれども穏やかな寡居生活から華やかさに隠れた権謀術数の渦巻く後宮への転出は苦渋の選択であったはずだから、具平親王家へむけての発信の意図を含む可能性を否定はできない。

そうした中であって、末摘花のつれづれの生活風景や荒廃した宮邸が、『紫式部日記』に叙される式部自身の在様と近似するというのであれば、^{注(38)}帚木三帖と同じく自身の卑近な知見や体験を物語叙述の素材として用いているはずであって、その具体例として次の作中歌を挙げることができる。

晴れぬ夜の月まつ里をおもひ、やれおなじ心にながめせずとも ^{注(39)} (一七八頁)

これは、八月二十余日のこと、源氏が初めて末摘花と逢い、その後朝の文がようやく夕方になって届いた時の末摘花の返歌だが、『紫式部集』(実95、陽85)の「又おなじすぢ、九月、月明かき夜／おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれぬとも」(傍線久下)に近似し、^{注(40)}ともに男の訪れのない女の悲哀を訴えている。式部歌が、夫宣孝の夜離れを嘆くにしても、「長月の有明の月にさそはれて……」(『堤中納言物語』「貝合」)的な月夜の情趣感を漂わせて男の性情を達観しているのに対し、末摘花歌は降雨の設定で、女が月の出を待ちわびる体が散佚物語「月待つ女」^{注(41)}の趣であったのかもしれない。

いずれにしても共有発想が可能な状況だが、末摘花歌の方には『公任集』に次のようなさらに類似する例もある。^{注(42)}

兵部卿の宮にて月まつ心を

月影の出ぬ程だに有物を人まつ宿を思ひこそやれ ^{注(43)} (162)

おそらく雲間を待つ心境を男の訪れを待つ女の心情に比して詠じたものだが、「思ひやれ」との表現が常套句化しているとみられよう。

ここで問題としたいのは、むしろ詞書の「兵部卿の宮」で、『新大系』の脚注は「昭登親王(九九八―一〇三五)か。花山第二皇子、冷泉院猶子、母御匣殿別当平子、若狭守祐忠女、万寿元年頃兵部卿(小右記)。卑腹ながら皇室寡産の後期摂関期に、弟清仁と共に威儀親王として重宝された。三条あるいは四条辺に住み(小右記)、公任と私交があったものか。」(三〇〇頁)とし、『公任集全釈』は「父村上天皇、母師伊女の皇子、永平親王か。」(一七七頁)とする。^{注(44)}

家集編纂時の呼称からすれば前者となろうが、どちらの親王も確証はなく、公任(九六六―一〇四一)にとつて最も親交のあった宮家となると、公任母の醍醐天皇皇子代明親王女嚴子女王と姉妹であった村上天皇女御莊子女王を母とする具平親王だったから、兵部卿でもあった具平親王をまず想起すべきだが、『公任集』では具平親王はいずれも中務の宮(18・85・188・344・496・561番)との呼称で該当者から外れるとの判断であろう。しかし、月まつ宿が公任をはじめとする歌人や漢詩人たちの集う場として六条にある具平親王の邸宅千種殿が最も相応しい時代相があった。^{注(45)}そんな宮邸での詩会に参集するひとりに源順もいた。

前掲した源順の秀句「楊貴妃帰唐帝思、李夫人去漢皇情」(『和漢朗詠集』の詩題には「対^レ雨恋^レ月(『雨に^む対かひて月を恋ふ)』(『類聚句題抄』)とあり、さらに『江談抄』には「故老云はく、「数年作り設けて、八月十五夜の雨を待つ。六条宮に参りて作るところなり」と云々」^{注(47)}との伝承を付す。六条

宮とは、六条にある具平親王邸千種殿であり、その場での発表を期し、わざわざ八月十五夜の雨の日を待って作りおいた詩句だというのである。失った寵妃を慕い嘆く皇帝の心情に比して宮邸における月の出を恋う心境を詠ずるとは、いかにも月を愛でる趣向を凝らした作詠の場として文人たちに具平親王邸が選ばれたのかが知られよう。

つまり、末摘花巻で「雨降り出でて」（①二八六頁）との設定が、作意的に「月まつ里」を故常陸の宮邸から現実の具平親王邸へと誘引し、「おもひやれ」との慇懃が作者の心情と重なり、下句「おなじ心にながめせずとも」を誘発する末摘花歌となっているのではあるまいか。

「おなじ心」とはかつて親しかった親王家の同僚女房たちにむけて、心ならずもいま立場をかえた式部のメッセージとなっていたのではなかったか。「おなじ心」のタムは、『紫式部日記』の「はかなき物語などにつけて、うち語らふ人、おなじ心なるは、あはれに書きかはし、……」（傍線久下）と連動していることはあえて言う必要もなからう。^{注(48)}

もとより、若紫・末摘花両巻の一体化成立論に前掲公任歌を根拠とするつもりはないが、これも周知の『紫式部日記』の一コマ、酔いにまかせて公任が「あなかしこ、このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」と戯れたのも、見も知らずの式部に対してではなく、おそらく若紫巻をもって道長家への出仕を飾った事情をも察した上で、あざやかな転身とその彰子の男皇子敦成親王誕生に至る成果を、公任なりに称えたことばだったのである。物語はかくも拡散するものなのである。

五 末摘花巻の波紋

末摘花は宮の姫君だけに、その顔を醜くして夕顔の再来を願った光源氏

の恋愛失敗譚に仕立てたことは、ひとつの誤解を産み出していたのではなかったか。

『紫式部日記』に次のような記載がみえる。

源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずることども出できたるついでに、梅のしたに敷かれたる紙にかかせたまへる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ
たまはせれば、

「人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ
めざましう」と聞こゆ。（二二四頁）

この道長と式部との和歌の応答箇所は、いわゆる消息文と言われる後に続く「十一日の暁」「すきもの」「水鶏くひな」の三段にわたる年時不確定の記事として知られる。

この三段が現存『紫式部日記』の首欠説と絡むのであれば、寛弘五（一〇）年秋以前であり、また消息文により寛弘六（一〇）年正月三日以後の記事が途絶え、寛弘七（一一〇）年正月三日の記事で再び実録が復活したとすれば、これらはその間の記事であって、かろうじて残ったものとしての理合が可能となるはずである。

いずれにしても本稿にとっては、道長の「すきものと」歌が、『源氏物語』の作者である式部に対して、戯れにしても色好みの物語を書いた女ひとだから「すきもの」に違いないとの発想をもって仕掛けられた詠であることを確認できれば、物語は虚構として受け取られず、現実の反映として常に見做されていく可能性が指摘でき、ここから「月まつ里」の宮の姫君が醜貌であるゆえ、具平親王家の姫君にもそうした疑念を抱かせかねない状況

にあったのではないかと思われる。

しかもこの場面は、『源氏物語』の特定の場面が明示されているわけではないものの、光源氏の色好みに関わるとすれば、最も想起されるのは帚木三帖であり、とりわけ夕顔巻の「咲く花にうつるてふ名はつめども折らで過ぎうきけさの朝顔」(①一四六頁)が、「すきものと」歌の状況と表裏に見合っているといえよう。六条わたりの女君のもとから早朝立ち去る光源氏を戸口まで見送る侍女中将の君を庭前に咲く美しい朝顔に見立てて、このまま手折らずに見過ごしてゆくことはできないとする意が、「名」によって浮気者の評判とともに詠まれているのは、眼前の梅を「酸^すき物」と「好^すき者」とに掛けての道長の戯れと符合しているよう。さらに、この場面の問題は以下のような稲賀敬二の指摘によって頼通と具平親王女隆姫との結婚時期の問題へと波及していく。

それは『源氏物語』の古注である了悟の『幻中類林』「光源氏物語本事」^{注49)}に記されている次の一文に端を発している。

左衛門督殿の、

梅の花咲きての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

と、家の日記に見えたり。

稲賀氏は、この「家の日記」を紫式部のそれ、つまり『紫式部日記』とし、鎌倉期に存在した『紫式部日記』の異本にあった逸文と推定したのであった。そして、この現存本に見えない逸文を本来あるべき位置に定位すれば、この梅の実に絡む道長と紫式部との応答箇所^{注50)}の文に直接続くと判断して次のように述べている。

現存日記のこの応答に、先の左衛門督の口にした歌を続けると場面はうまく一つにまとまる。すなわち、左衛門督は、道長・紫式部の応答の表面上の主題になった「梅」「すきもの」の素材を受けつぎ、且、紫式部が「誰か」「口ならしけむ」と道長に切りかえした反問に、左衛門督が答えるかたちをとる。「あなたは、『誰か、口ならしけむ』とおっしゃるが、お答えするまでもなく既に古歌にあるじゃないか。『梅の花咲きその後の身(寒)』だからに決まっている。しらばっくれてもだめですよ」というわけである。

左衛門督が口にした「梅の花」歌は、自作ではなく『古今集』(雑躰、よみ人しらず、一〇六六)所載の古歌で、結局は道長に加担し、式部を「好き者」として、やり込めている。そのような「左衛門督」はいったい誰なのかというと、稲賀氏は公任が相応しいとし、逸文を含む場面は、本来寛弘五(一〇〇六)年夏の記事であったとする。

現存『紫式部日記』では「左衛門督」と記されるのは、公任だけではなく頼通もいる。公任は長保三(一〇〇二)年三月に左衛門督となり、寛弘六(一〇一七)年三月四日大納言に任ぜられるまでの官職にあり、同年三月四日その後を襲って左衛門督に任ぜられたのが頼通であった。つまり当該逸文の「左衛門督」は、応答の中心素材が「梅の花」ではなく「梅の実」である限り^{注51)}、公任であるならば、寛弘五(一〇〇六)年のこととなり、一方頼通であるならば、寛弘六(一〇〇七)年の記事となるわけである。

稲賀氏は頼通より公任の方が適うとする根拠に、大意即妙に『古今集』歌を引いて軽口をたたき、式部をやり込める行為及び現存『日記』冒頭部における清純で貴公子然とした頼通のイメージと相違する点を挙げている。しかし、そもそも親兄弟でもない公任が^{注52)}、御簾の内の中宮御前で気楽に軽

口をたたくなどということが可能かどうか考えてみれば、明らかに不自然な設定となってしまう。さらに現存『日記』では「左衛門督」とあり、逸文のように「殿」の敬称が付くことはなく、「家の日記」が『紫式部日記』であるのかさえ疑われてくる。

そこで考えられる一つの解として、現存『紫式部日記』を式部自身により再編集された作品と見做し、それが道長家に献上され、原本は式部家に伝存されていたのだという理会で、その原本には「左衛門督殿」と書かれてあったということになる。現存本における寛弘五（一〇〇八）年五月の法華三十講を含む首部欠脱の問題もさりながら、「このついで」以下の消息文は、道長家からの下命で原本の寛弘六（一〇〇九）年正月三日以降の記事を消し去ったのではないかとする疑念が筆者にはある。

削除された記事の主要内容は、頼通と隆姫の婚儀と具平親王の死に関することであつたはずである。道長家にとって敦成親王誕生に次ぐ慶事であるはずの嫡子頼通の結婚を『紫式部日記』は何故書かなかったのか、いや書いたものを残せなかったのか。その結婚と具平親王の突然の死とが関わっていた故なのかどうか疑念は尽きず、さらに当の道長の『御堂関白記』も嫡子の結婚には一言も触れず、寛弘六（一〇〇九）年七月二十九日条に、中務卿具平親王の薨去を伝聞の形で記すだけであり、^{注(53)}その無頓着な姿勢がなおさら疑念を深めるばかりなのである。

『紫式部日記』の「十一日の暁」以下三段が、偽装の上寛弘六（一〇〇九）年の記事として残ろうじて残った部分だとした場合、しかも「すきものと」歌の場面では頼通が登場したとなると、その箇所を削除せざるを得なかった理由として、父道長の色好み性をまとい変貌した頼通が、^{注(54)}自身の結婚相手が末摘花と同様な醜女ではないかと危惧した時、その容貌を見極め

ずに座したまま結婚当日を待つばかりであつたのかどうかというところまで想像を逞しくすると、深刻な事態を招きかねない物語として末摘花巻は浮上してくるのである。

*

ところで、隆姫との結婚前後の頼通の動向を知り得る資料として近時『御堂関白集』の次の贈答が注目されているが、ここでも「左衛門督」と「左衛門督殿」とが問題視されている。^{注(55)}

左衛門督殿の、北の方にはじめてつかはす

降り立ちて今日は引くにもかからねばあやめのねさへなべてなるかな（五九）

御返事

あやめ草引けるを見れば人しれず深きたもとあらはれにけり（六〇）

五九番歌詞書の「左衛門督殿」を杉谷寿郎が公任とする以外は、森田^{注(57)}、妹尾好信^{注(58)}、平野由紀子、そして加藤静子^{注(59)}がともに頼通とし、頼通がはじめて贈った求婚歌と解している。頼通が左衛門督となるのは再三記しているように寛弘六（一〇〇九）年三月だから、この贈歌が頼通だとすれば、それ以降の作詠となり、歌材が「あやめ」であるところから、さらに同年五月五日の詠と知られるはずなのである。

加藤氏は、この贈答歌が家集の配置年次から推定される寛弘七（一〇一〇）年五月五日の詠であることに疑問を呈し、『御堂関白記』寛弘七（一〇一〇）年五月十四日条に記されている「左衛門督内方渡」を挙げ、頼通室は「内方」として十四日に同年の道長法華三十講の聴聞に参会しているとし、なお以下のように述べている。

『御堂関白集』五九・六〇番の歌が五月五日の歌なので、それ以後十四日以前に結婚が成ったとは、五月の月は当時結婚を忌む風習があったので、五月中の結婚はありえない。また隆姫父具平親王の死が、寛弘六年七月二十八日なので、その後は重服となり、結婚は薨去以前となり、『御堂関白集』の求婚の和歌は、寛弘五年（一〇〇八）かもしくは翌六年の五月となろう。

もし当該求婚歌が加藤氏の言う如く寛弘五（一〇〇六）年五月五日だとすると、やはり土御門邸では法華三十講が行なわれていて、しかも盛大な五巻日で公卿たちが数多く参列したことが『御堂関白集』に記されている。^{注60}そして、現存『紫式部日記』で失われた首部の中心記事であったと指摘されているのが、この寛弘五（一〇〇六）年五月の法華三十講なのだから、五日当日の記事に前記の頼通の隆姫への求婚歌が含まれていたとしたら、それが首部欠脱の根拠になり得るのではないかと考えてみたのであるが、どうもそれは成り立たないようである（寛弘五（一〇〇六）年では頼通は三位少将だからというのではなく、また求婚から結婚までの期間が長過ぎるという理由でもない）。

それでは加藤氏が指摘したもう一方、つまりこの求婚歌が寛弘六（一〇〇七）年五月五日に贈られたのかどうかだが、加藤氏は同論考でもう一つの資料を挙げて、二人の結婚時期を寛弘六（一〇〇九）年七月二十八日の具平親王薨去以前のある年月を特定していたのである。その資料というのは、久保木秀夫によって指摘された『中務親王集』の新出断簡の二首である。^{注62}

一三〇〇ひそへてしつゝろなきよのなかに くものもりをもちとくきかな

これをきゝて、左門衛のかみ、かへしゝたりける人にいひおこせ

正月衛つこもり、左門督殿、女房たち、うたよみたりけるを御らんして（以

下判読不能）

一四なかはゆくおとたにほとたとしはひさしきを

加藤氏は一三番歌の「左衛門のかみ」を公任とし、一四番歌の「左衛門督殿」は頼通だとする。^{注63}その根拠に同じく久保木秀夫が見いだした『中務親王集』「大富切」の断簡には「四条大納言」と記されているのは『千載集』所載の具平親王と公任との贈答歌であって、長保元（九九〇）年のことと知られる。公任が右衛門督から左衛門督に転じたのは、長保三（一〇〇二）年三月であったから、詠作当時の官名は右衛門督であったが、「大富切」では「四条大納言」と極官の大納言で記されていた。二様の『中務親王集』新出断簡の公任の官職表記の相異には目をつぶって、公任の官職には「殿」が付されていないという共通性を指摘して、一四番歌の詞書の「左衛門督殿」を頼通と認定し、また「御らんして」の主体を具平親王とし、家族となった頼通の女房たちとの和やかな場面と解して、次のように述べている。

一四の断簡は、頼通と隆姫との結婚を寛弘五年十二月か翌年正月早々と考える一つの材料になりえないかと思うのである。二人の年齢は、もし寛弘五年なら、頼通十七歳、隆姫十四歳である。

加藤氏は前掲『御堂関白集』の求婚歌を寛弘五（一〇〇六）年かもしくは寛弘六（一〇〇七）年五月としていたが、『中務親王集』新出断簡に拠る結婚時期の推定からすれば、当然その求婚歌が後者の寛弘六（一〇〇九）年五月という案はなくなり、前者の寛弘五（一〇〇六）年五月の贈答歌であることが確定する。よって、筆者は寛弘五（一〇〇六）年五月五日に頼通の隆姫への求婚歌

があったから、原『紫式部日記』の首部が削除される原因ともなったのではないかと憶測したのだが、どうもそれは間違いなのではないかと思われるに至った。

繰り返す言うが、筆者は頼通と隆姫との結婚が道長家にとって男皇子誕生に匹敵するほどの慶事であるにも拘らず、何故現存『紫式部日記』や『御堂関白記』には全く記されないのかという疑問を提示しているのである。加藤説では、二人の結婚を寛弘五(一〇〇六)年十二月か寛弘六(一〇〇七)年正月早々と推定していることになるのだが、前者はさらに期日が限定される。加藤氏は中務宮具平親王方の事情として、具平の母莊子女王が寛弘五(一〇〇六)年七月十六日に薨去(『日本紀略』)していたため、五ヵ月の服喪期間となり、忌明けが十二月となるから、結婚は寛弘五(一〇〇六)年十二月であったとしても同月下旬となり、また後者の場合であったとしても、前掲『中務親王集』新出断簡一四番歌の詞書に「正月つこもり」と記されていたため、たとえ寛弘六(一〇〇七)年であったとしても「正月早々」と限定された訳で、いずれにしても両家にとって盛大な結婚の儀となれば、その準備の慌ただしさは目に見えている。つまり結婚自体は可能であったとしても、準備等々を考えれば、常識的に無理というものであろう。

また現存『紫式部日記』では寛弘五(一〇〇六)年十二月二十九日は式部にとって記念すべき日で、「師走の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし。」と、道長家に初出仕した日を回想している。式部は十一月二十八日の賀茂の臨時祭で晴の祭の使いを務めた教通の成人姿を記して、一ヵ月程里下りをしていたことになり、明けて寛弘六(一〇〇七)年正月は三日に始まる若宮(敦成)の戴餅の儀を記して、以後いわゆる消息文へと入っていく。十二月だとすれば、式部はわざわざ頼通の結婚の儀を避

けて実家に帰っていたということになるのだろうか。また翌年正月だとすれば、戴餅の儀以後「正月つこもり」までとなり、頼通の結婚に関して書けなかったのか、それとも書かなかったのか、いずれにしても式部の執筆姿勢は全く不明と言う外ないのである。

そこで、一四番歌の断簡詞書の「左衛門督殿」の「殿」が付された「左衛門督」については、頼通認定を崩す根拠は上記以外に見いだすことはできないけれども、『御堂関白集』の前掲五九番「降り立ちて」歌の詞書の「左衛門督殿」の方は、頼通とするには認め難い点が生じてくるようである。

すなわち、この詞書は「左衛門督」の下に読点をつけて、「左衛門督、殿の北の方にはじめてつかはす」と解すべき文であって、「左衛門督」は公任とし、「殿の北の方」を道長の正妻倫子として、公任がはじめて教通の母倫子に贈歌したと理会するのである。ただし「殿の北の方」を倫子と解するには疑問もあって、倫子ならば「殿の上」(一一・二二番歌詞書)となるはずだから、そう解することはできないとの反論がまず予想される。ところが五九番「降り立ちて」歌への答歌となる六〇番「あやめ草」歌の詞書は「御返事」とあり、倫子の方が相応しいのである。

なぜなら、この贈答歌の前には同じ「あやめ草」を歌材にした尚侍妍子(倫子所生、彰子の妹)から葉玉に菖蒲の長い根を添えて健康長寿を祈念する贈歌が所載され、その答歌五八番「降り立ちて」歌の詞書「御返事」は、倫子から娘妍子への感謝を表しているからである。五七・五八番歌と五九・六〇番歌の二組の贈答歌は関連しているとの認識だが、それも家集編纂時の配列上の作意だとすれば、こうした筆者の理会は崩れるだろう。

それにしても五九番歌詞書「左衛門督殿」を頼通として、九〇番歌詞書

「左衛門督殿」につなげるとしたら、八八番歌は尚侍妍子から父道長へ贈る薬玉と菖蒲の輿をあしらった州濱に添えられた詠で、道長の答歌八九番の詞書には「御返」とあり、頼通の贈歌九〇番には返歌は記されないが、同じく父道長に宛てた詠で、両者とも長い菖蒲の根を引いて父道長の長寿を祝っている。八八・九〇番歌を平野『全釈』は寛弘八（一〇二二）年五月五日のこととしている。

つまり、これらを連関している贈答歌として考えれば、五九番歌詞書の「左衛門督殿」を頼通とした場合、頼通が左衛門督となるのは、寛弘六（一〇〇九）年三月四日以降だから、五九番歌は寛弘六（一〇〇九）年五月五日となり、これが隆姫への最初の求婚歌ということになる。また「左衛門督」を公任だとして『御堂関白集』一・二・三〇・三四番歌詞書表記の官職名として組み入れ、これらがいずれも道長や頼通への親しさが滲む贈答歌となっているから、五九番歌を公任がはじめて道長正妻倫子に贈った詠歌としてその長寿を祈念するというのも妥当性があると思われる。

その場合は、当歌は寛弘六（一〇〇九）年三月四日以前の五月五日の詠となるから、寛弘五（一〇〇八）年五月五日以前の贈答歌ということになる。ただ私説がどうしても成り立ち得ようがなく、五九番歌は頼通がはじめて隆姫に贈った求婚歌だということになり、これが寛弘五（一〇〇八）年五月五日の詠歌となるならば、頼通と隆姫との結婚に関して何らかの差し障りがあり、この詠歌が記されていることが原因で、寛弘五（一〇〇八）年五月の道長家法華三十講の記事まで削除して現存『紫式部日記』は成り立っているのだという考え方を、逆に強力に推し進めることができるようになる。その場合、『御堂関白集』に何故、頼通と隆姫との結婚前の贈答歌が所載されたのかを問えば、この家集は道長家からの下命による編集ではなく、当時特殊な

事情があったことを弁えない道長家の女房が、ただ主家の人々の素晴らしさが残された文反古を集めて編纂した歌集ということになる。その編纂した時期も寛弘八（一〇二二）年以降となり、頼通と隆姫との結婚が成立してから既に二年程経過していた。

*

さて、頼通と隆姫との結婚に関わる記事が削除され再編集されたのが現存『紫式部日記』だと言うならば、当然以下の記述が『日記』にあることで反論されるだろう。

中務の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせたまふも、まことに心のうちは、思ひぬたることおほかり。

（一五〇頁）

当該記事は、中宮彰子が産後の養生のため十月十余日まで帳台から出られない事情を記した箇所と十月十六日の土御門邸行幸を問近にひかえた間に位置している。「中務の宮わたりの御こと」が、頼通と隆姫との結婚に関わる事だとする認識は、あくまで後に二人が結婚した事実を踏まえて解釈しているまでで、道長家の中でも当事者以外はこの案件の具体的内容は不明とする外ない記述である。問題は、寛弘五（一〇〇八）年五月五日の法華三十講五巻の日が描かれていたはずの原『紫式部日記』に、もし『御堂関白集』に所載されていた頼通の求婚歌も記されていたのだとすると、現存『紫式部日記』の首欠問題に関わり、それが寛弘六（一〇〇九）年の実録日次日記の形態を崩してまで欠脱した理由とも連動しかねない重大事であり、それはまた何故排除されねばならなかったのかという現存『紫式部日記』成立事情の問題であるとともに、『源氏物語』末摘花巻とも関わってくる

問題なのである。

『日記』の前掲記述に対して、加藤氏は求婚歌から結婚までの期間が長いとみて、前記した中務宮具平親王の母莊子女王薨去による服喪期間であることを指摘しているが、それならば公に知られている事情であり、わざわざ一介の女房である式部に相談する必要もなからうし、また結婚の準備が、たとえ順調に「具体的なかたちで進んで」（加藤）いたとしても、道長にとって何か気になる点があつての相談とも考えたいところである。逆に順調に結婚にむかって進展していなければ、なおさらその理由なりを宮家に縁のある式部にやむを得ず尋ねてみたくなつたということもあらうと思われてくる。しかし、とにかくこの道長からの相談が式部を「まことに心のうちは、思ひゐたることおほかり」と悩ませていたのである。いったいその相談内容とはどのような事に及んでいたのだろうか、全く不明と言う外ないのである。

ところが、二人の結婚の期日を加藤氏は『中務親王集』新出断簡を挙げて、「寛弘五年の十二月下旬か、翌六年正月早々」と指定したのである。そうしなければいずれにしても結婚は二、三ヵ月後に迫っていたはずなのであり、その事実を隠蔽するかのように現存『紫式部日記』は、前者ならば頼通の結婚の事実を全く無視して書かなかつたことになるし、また後者ならば削除してその代わりに辛辣な女房批評を含む消息文に置き換えたということになるのである。

このような深刻な事態に式部は直面しているはずなのであり、『日記』にわずかに中務宮家のこととして記し得たのは、当事者ないし一部の者しか知り得ない事実が他にあつたからこそであり、この結婚の遅延に式部は何ら関係していないことをどうしても訴えたかつたからであらう。この一

文はきつとかつての具平親王家に仕えた同僚女房たちにむけて発信され、何とか身の潔白を証明したかつたのではないかとも思われてくる。

『栄花物語』（巻八「はつはな」）では、この結婚を中務宮家の方からの申出と記すが、政治向きには無縁の宮の生活信条からしても、むしろ道長の「男は妻がらなり。いとやむごとなきあたり参りぬべきなめり」との尊貴な血統を望む結婚観として、この婚姻への積極性は道長方にあつたであらう。次は具平親王の六条の私邸千種殿への婿入りの模様となる。

御有様いと今めかし。女房二十人、童女、下仕四人づつ、よろづいといみじう奥深く心にくき御有様なり。今の世に見え聞ゆる香にはあらで、げにこれをや古の薫衣香などいひて、世にめでたきものに言ひけんは、この薫にやとまで、押しかへしめづらしう思さる。姫宮の御年十五六ばかりのほどにて、御髪など督の殿の御有様にいとよう似させたまへる心地せさせたまふに、めでたき御かたちと推しはかりきこえさせたまふべし。

（①四三五―六頁。太字は久下の所為）

この盛大な婿入りからして婚儀は順調に行なわれ、何か問題など入り込む余地はなさそうである。前掲『中務親王集』の新出断簡「正月つこもり」の光景からして、^{注(64)}新婚三日目の夜の露頭の儀における具平親王の詠として成り立つかもしれない。また隆姫の年齢にしても「姫宮の御年十五六ばかりのほど」とあり、寛弘六（一〇〇五）年正月のことであれば、隆姫は十五歳であり正しい表記となる。

しかし、注視すべきは、「御髪など督の殿の御有様にいとよう似させたまへる心地せさせたまふに、めでたき御かたちと推しはかりきこえさせたまふべし。」との行文で、隆姫の容貌に関して何という危うさに満ちた内

容と文体であろう。「督の殿」つまり尚侍妍子の髪のめてたさは『栄花』に度々記されていたことゆえ、それと比較して隆姫の容貌の美しさを言うにしても、それは取りも直さず、髪だけを唯一の美点とした末摘花の幻影に立ち戻らざるを得ないのであり、それをもって「めでたき御かたちと推しはかりきこえさせたまふべし」との推量は、まさに醜貌の姫宮であることの証明に外ならないのではなからうか。

この行文は、いわば隆姫の容貌に関して世に疑念があったからこそ、それを打ち消すためにわざわざ書き記したというに近い内容と文体であったが、逆にその疑惑を深めることになっていると思わざるを得ないのである。しかも前半には、「今の世に見え聞ゆる香にはあらで、げにこれをや古の薫衣香などといひて」とあり、ことさら古風な香であることを強調したこの記述も、古風な末摘花を想起せずにはおかないのである。なぜなら、その薫衣香は、蓬生巻で他ならぬ末摘花が、九州に下っていく乳母子の侍従に餞別の品として贈ったのが、「昔の薫衣香のいとかうばしき一壺」(②三四一頁)だったのであり、『栄花』の頼通婿入りに関する記述は、『源氏物語』における末摘花造型を典拠としていたのだと確信できるのである。

そこで、再び前掲『紫式部日記』での道長から相談を受けた際の式部の苦悶の表情に立ち返ってみると、その相談内容に姫宮の容貌に関することが含まれていて、具平親王家に仕えた経歴のある式部に何かと相談をもち掛けていたのではないかと思われる。もちろん隆姫誕生は長徳五(九七五)年ごろと考えられるから、式部は既に宮家から身を引いていた時期で、隆姫を間近かに知り得ない立場であった。

もっとも「そなたの心よせある人」とは、具平親王が式部を縁ある者としていたとの道長の判断を示していて、『新編全集』が頭注に指摘するよ

うに、式部の従兄伊祐の養子頼成は、実は具平親王の子であったから、その相談が姫宮の容貌を直接問ひ質すといったものではなく、具平親王家の内情について、仕えた女房でなくては知り得ない内々の事柄について話が及ぶことがあったのだろう。

親王の子たちに関して、『栄花』には「女宮三所、男宮二所ぞおはします」(①四三四頁)とあるから、頼成は師房以外の男子として世に知られていたことになるが、他に隠し子がいたのかどうかなどとする推測が多岐に及ぶこともあったかもしれない。^{注65}つまり式部の「まことに心のうちは、思ひぬたることおほかり」とは、そこにさまざまな思案にくれていた困惑の表情を読み取るべきであろう。

当該『紫式部日記』の記述に関して、福家俊幸は紫式部の介在について「道長家と具平親王家との家と家との正式な婚姻に、紫式部という女房が介入する余地があったとは考え難いのではなからうか。」と極めて慎重だが、「かたらはせたまふ」及び「思ひぬたる」の表現を『源氏物語』の用例から検証して次のように述べている。^{注66}

「語らふ」と「思ひぬたる」が『源氏物語』の中で一つの文中で使われている例はないが、二つのことばの連携は主人が女房に縁談の仲介を依頼するにふさわしい構文を形成しているのである。先に触れたように、『源氏物語』末摘花巻の前半は光源氏が大輔命婦という女房を介して、末摘花のもとに通うようになるまでの顛末が描かれているが、ここに「語らふ」と「思ひぬたる(る)」とが集中している。具体的には、末摘花のもとへの手引きを求めた光源氏の姿が三例の「語らふ」とともに記され、それに対して末摘花の琴の技量や光源氏との関係の進展への不安を心の中に抱く(そしてそれを口に

しない) 大輔の命婦の様子が二例の「思ひゐたり」で記されているのである(なお大輔の命婦は色好む女房として造型されていて、光源氏の「語らふ」行為に女房に対する色めかしい戯れの思いがなかったと言いつけないだろう)。とはいえ、この末摘花巻前半と『紫式部日記』の当該記述との間に直接的な因果関係があるという主張をしているわけではない。ただ『紫式部日記』の「語らふ」と「思ひゐたる」の内実が、『源氏物語』の用例と比べることで明確になるのである。物語の筋道の重なりというよりも、「語らふ」や「思ひゐたる」ということばのベクトルが、『源氏物語』との回路を証し立てているというのが正確であろう。確かに『紫式部日記』は「おほかり」と結ばれているように、紫式部はあれこれと思っではいるのであるが、その内実を記そうとしない筆法は、主人との相関関係、すなわち女房としての作者の身の上に拘束されているのであり、それは『源氏物語』と番えることで明確になるのであるであった。『紫式部日記』の当該箇所は『源氏物語』の世界に通じているのであり、そのような視点から読み換えることが可能であろう。

長文の引用となってしまったが、福家氏は『源氏物語』との回路を確認することで、前言を翻すかのように「道長は具平親王家とゆかりを持ち、その動静に通じている女房に、息子頼通の縁談の仲介を依頼した。」と述べるに至っているのである。

ともかく、この福家氏による検証によって「語らふ」と「思ひゐたる」との二つの表現から『源氏物語』との回路を辿れば、前述した『栄花物語』と同じく末摘花巻に行き着くのであり、そこからさらに筆者はこの構文の意図するところを考えれば、宮の姫君である末摘花本人の容貌に関わ

ることは疑問の余地のないこととなって、『日記』の当該記述が中務宮である具平親王の息女隆姫の容貌への疑念に及ぶことは明らかなのであり、その疑念を払拭できずにいる道長・頼通父子の姿を背景に据えることができるのではないかと思っている。しかも彼らにしてみれば、紫式部は大輔命婦と同じく宮家と縁があり、色好みの女房とみており、「縁談の仲介」というより、かいま見の仲介がその内実に迫まる言い方となろうか。

*

頼通と隆姫との縁談が確実視される過程で『源氏物語』の末摘花巻との関係性が浮上しているとなれば、末摘花巻の成立は寛弘二(一〇一五)年十二月だから、寛弘五(一〇二〇)年現在からすれば三年前であり、作者としては予期せぬ事態に直面しているようだけれども、かつての具平親王家の女房たちにとっては、同じ宮家の事として発表当時から既に不満が噴出していた可能性があり、式部と絶縁するような同僚女房がいたかもしれないのであり(『紫式部日記』、具平親王家への忠誠を託して「同じ心」としてのメッセージを発信したにも拘わらず、末摘花巻は逆に同僚女房との乖離を生んでしまった予想外な位相にあったとも考えられ、信用を失っている式部にとってはたとえ仲介を依頼されたにしても不可能であった現状から「思ひゐたることおほかり」の心情を読み解くこともできよう。

むしろそう考えた場合、末摘花巻の続篇となる蓬生巻における末摘花の醜い容貌に関する記述が見えなくなり、その古風で頑なな生活信条が強調されるのを、末摘花の変貌として論じられることがまある。

森一郎はその欠点が末摘花巻では嘲笑の対象であったのが、蓬生巻では零落した宮家であってもその尊貴性を失わぬ美質として描かれているとす(注68)人物造型が構想、主題の進展により奉仕せしめられ、「人物としての

統一性」を欠く例として採り挙げられている。また山本利達は、両巻の共通性を指摘した上で、末摘花造型の一貫性を言い、蓬生巻での変貌には否定的で、「語り手の姿勢乃至は視点を変えた結果」とする。^{注69)}

前者は物語を動態として、後者は物語を静的構造体として分析した論と理会しているが、両者とも末摘花巻を継ぐ蓬生巻の成立を前提として成り立つ論である。それに対し、筆者は末摘花巻が紫の上系の物語と一体化を図るために夕顔追慕の形をとりながら、その執着を切り捨てさせるために光源氏の滑稽譚として描いた物語と理会しているから、末摘花巻巻末の「かかる人々の末々いかなりけむ」の「かかる人々」には末摘花をはじめ空蟬や夕顔の遺児（のちの玉鬘）などを指すこととし、「末々いかなりけむ」とは後続の物語を予期した言い方ではなく、読者にそれぞれの将来を想像するよう促し委ねた巻末表現で、いわば帚木三帖の物語の打ち切りを宣言したもの言いだと理会したのである。

つまり、成立当初の末摘花巻は具平親王家との惜別の物語として書かれたのだったが、醜女として宮家の姫君を描いたため、具平親王家の女房たちから非難の声が上がり、それゆえ蓬生巻以下の続篇を書く必要にせまられたのではないかと思われる。その蓬生巻にせめて末摘花の容貌について触れないことで懷柔に努め、宮家の尊厳を前面に打ち出したのだといえよう。須磨謫居から帰還した光源氏に花散里を訪れる途次、末摘花を忘却の彼方から蘇らせたのは、作者にとっても偽らざる真実であったのであろう。

六 むすびに代えて

『源氏物語』はいったい何のために書かれたのか、あるいは誰のために書かれた物語なのかを問う時、その目的や意図とは違って先行した物語、

つまり帚木三帖を収束するため、末摘花巻は書かれたのだといえよう。本稿が『源氏物語』の成立過程にこだわりすぎたにしても、具平親王家から転出して中宮彰子の前にはじめて披露する物語として若紫・末摘花両巻がその役割をみごとに果し得る位相にあったことはあきらかになっただろう。引き続き紅葉賀・花宴家両巻がまた対照的な一對として成立していることは既に著名な清水好子の論考があり、中宮彰子のための物語として、かつまた一条天皇のための物語としても本格的に始動してくる両巻であることは、従来の説を参照するだけでも充分に納得できる研究状況にあり、その点から次稿に予定している「紅葉賀・花宴巻の位相」を順当に執筆、発表していくことが、筆者に残された時間の制約もあって、妥当かどうか考慮しているところである。

というのも、紫式部を襲う二度目の危機こそが「宇治十帖」成立の真相に関わっており、はやくその点を明らかにしなければならないからである。しかし、その結論は拙著『源氏物語の記憶―時代との交差』（武蔵野書院、平成29（2017）年）で既に大略述べていることであって、本稿も同書「末摘花の位相」に直結している。ただ本稿はその論証方法を単に繰り返している訳ではなく、あらたに読み解くべき資料を加えて再考している。

また本稿が切り拓く道筋は、玉鬘十帖にも及ぶことにもなっており、昨今玉鬘十帖は彰子の妹尚侍妍子のために作られた物語などとする説が目につくが、玉鬘十帖もやはり具平親王家の女房たちにむけても成り立つべき物語群であって、こうした問題にも直面していて、さまざまな課題が尽きないのである。

注

- (1) 伊藤博『源氏物語の原点』(明治書院、昭和55(一九八〇)年)「源氏物語始発部の層序―帚木三帖・末摘花巻をめぐって―」
- (2) 久下『源氏物語』成立の真相・序―紫式部、具平親王家初出仕説の波紋―(昭和女子大学「学苑」934、平成30(二〇一八)年8月)
- (3) 玉上琢彌「源語成立攷」(『国語国文』昭和15(一九四〇)年4月。のち『源氏物語研究』角川書店、昭和41(一九六六)年)
- (4) 島津久基『対訳源氏物語講話 卷三夕顔』(矢島書房、昭和22(一九四七)年)
- (5) 新聞一美「源氏物語若紫巻と遊仙窟」(『源氏物語の展望 第五輯』三弥井書店、平成21(二〇〇九)年)
- (6) 新聞一美「もう一人の夕顔―帚木三帖と任氏の物語―」(『論集中古文学5 源氏物語の人物と構造』笠間書院、昭和57(一九八二)年、のち『源氏物語と白居易の文学』和泉書院、平成15(二〇〇三)年)
- (7) 新聞一美「夕顔の誕生と漢詩文―「花の顔」をめぐって―」(『源氏物語の探求 第十輯』風間書房、昭和60(一九八五)年、のち前掲書)。「陵園妾」に「顔色如花命如葉」とあり、薄命の美女としての夕顔造型に与る。
- (8) 新聞一美前掲注(6) 論考。
- (9) 新聞一美「源氏物語の女性像と漢詩文―帚木三帖から末摘花・蓬生巻へ―」(和漢比較文学叢書第四卷『中古文学と漢文学Ⅱ』汲古書院、昭和62(一九八七)年、のち前掲書)に拠る。
- (10) 「いとど愁ふなりつる雪かきたれいみじう降りけり。空のけしきはげしう、風吹きあれて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。」(①二九二頁)が、「夜深煙火尽、霰雪白紛紛」に当たること『細流抄』に指摘がある。以下「幼者形不蔽」に続く。
- (11) 玉上琢彌『源氏物語評釈 第二巻』(角川書店、昭和40(一九六五)年)二二四―二二七頁。後の①④を含む。
- (12) 新聞一美前掲注(5) 論考。
- (13) 『伊勢物語』と『遊仙窟』との関わりを指摘した論に丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」(『源氏物語と白氏文集』東京女子大学文学会、昭和39(一九六四)年)、佐藤敬子「若紫巻のかいまみ―遊仙窟・伊勢物語初段との引用関係を中心として―」(『論究』37、平成5(一九九三)年4月)等がある。
- (14) 松田成穂「末摘花巻末部の読み方に関する異見―歌語「梅の立ち枝」に触れて―」(『金城学院大学論集 国文学編』41、平成11(一九九七)年3月)には、このキーワードとなる「紅の鼻」の成語は見えない。松田論を発展させた田中喜美春「招誘歌の深滞」(『国語と国文学』平成12(二〇〇〇)年10月)に表記される。以下「梅の立ち枝」に関わる論述は両論の学恩に拠る。
- (15) 玉上琢彌前掲注(3) 論考において、〈並び〉の解釈を「一まとめに発表されたものを、並の巻といふ」として物語の発表事情に起因するとの考えを示す。
- (16) 玉上琢彌前掲注(11) 書一七二頁には、若紫(紫)―末摘花(紅)、紅葉賀―花宴、葵(賀茂神社)―榊(伊勢神宮)との指摘があり、前後二巻対照的な巻名構成で、このような巻序形態からしても若紫・末摘花両巻から物語は新たに組み立てられ創作されたことが知られる。
- (17) 三宅清『源氏物語評論』(笠間書院、昭和47(一九七二)年)
- (18) 武田宗俊『源氏物語の研究』(岩波書店、昭和29(一九五四)年)「源氏物語の最初の形態」
- (19) 斎藤正昭『紫式部伝―源氏物語はいつ、いかにして書かれたか』(笠間書院、平成17(二〇〇五)年)一〇七頁。
- (20) 斎藤正昭前掲書一三〇頁及び同氏『源氏物語の誕生―披露の場と季節』(笠間書院、平成25(二〇一三)年)二七頁。

(21) 『権紀』長保三(1001)年八月三日条に拠れば、三歳の敦康が初めて彰子の御殿藤壺に赴いた。寛弘二(1005)年十一月には読書始めが中宮の在所藤壺で行なわれる。

(22) 定子はまず敦康を妹の四の君「御匣殿」に委ねた。定子没後、四の君は帝寵を受け懐妊したが長保四(1003)年に死去した『栄花物語』巻六「かかやく藤壺」。また定子懐妊(嬖子)で内裏退出中、一条の関心は彰子ではなく顕光女元子にむかっている。寛弘三(1008)年二月二十五日には一条が元子を内裏参入させている『御堂関白記』。いまだ桐壺巻以下の物語が成立発表されていない時期のことである。

(23) 下玉利百合子「『紫式部日記』にみる^{ひかり}耀と^{かけ}翳——一条天皇の肖像を中心に——」『講座平安文学論究 第六輯』風間書房、平成元(1989)年には「帝鍾愛の第一皇子ゆえに、彼は、中宮の許にその父を吸引する絶好の具として利用しつくされているようだ。」とある。

(24) 引用は、『新編日本古典文学全集26』(小学館)に拠る。

(25) 清水婦久子「源氏物語の読者たち——成立に関わって——」『むらさき』50、平成25(2013)年12月

(26) 高橋照美「藤原登子——〈物語化〉された尚侍」(高橋亨・辻和良編『栄花物語 歴史からの奪還』森話社、平成30(2018)年)

(27) 新聞一美「桐壺更衣の原像について——李夫人と花山院女御低子——」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、平成5(1993)年)、のち前掲『源氏物語と白居易の文学』

(28) 定子の妹「淑景舎の女御」原子は長保四(1003)年八月二十余日、鼻から出血して頓死した。この悲惨な事件の記憶が桐壺更衣の造型に関わったとする吉海直人「桐壺更衣論の誤謬——人物論の再検討」(『国学院雑誌』平成3(1991)年5月。のち『源氏物語の視角』翰林書房、平成4(1992)年)がある。なお付言すれば、こうした歴史上の事象から、〈ゆかり〉の着想がもたらされ、容貌

の相似だけではなく、血縁的なつながりが重視される『源氏物語』の骨格が築かれたのだろう。

(29) 『栄花物語』(巻一「月の宴」)には「参りたまひて後、すべて夜昼臥し起きむつれさせたまひて、世の政を知らせたまはぬさまなれば、ただ今のそしりぐさには、この御事ぞありける。」「(『新編全集31』①五一頁)とある。『源氏物語』の影響下の記述とも考えられるが、桐壺帝の姿に重なる。

(30) 新聞一美前掲注(27) 論考。なお類似表現を示す傍点も同論考に従う。

(31) 慶滋保胤「為「大納言藤原卿息女女御四十九日」願文」(『本朝文粹』巻十四)

(32) 「李夫人」との関係は、藤井貞和「光源氏物語の端緒の成立」(『源氏物語の始源と現在』三一書房、昭和47(1972)年)、新聞一美前掲書「李夫人と桐壺巻」及び「李夫人と桐壺巻再論」(日向一雅・仁平道明編『源氏物語の始発——桐壺巻論集』竹林舎、平成18(2006)年)、また同論集には胡潔「長恨歌・李夫人と桐壺巻再読——「情」へのまなざし——」等がある。

(33) 『大鏡』(師尹伝)には、村上天皇と宣耀殿女御芳子とが「比翼連理」を踏まえた誓いの歌のやりとり例がみえる。

(34) 引用は、『新編日本古典文学全集19 和漢朗詠集』に拠る。

(35) 清水婦久子「桐壺・淑景舎・壺前裁——物語の生成と巻名——」(前掲『源氏物語の始発——桐壺巻論集』)。なお『元輔集』「恋しくは」歌の傍線も同論考に従う。

(36) 清水婦久子前掲注(25) 論考。

(37) 久下前掲注(2) 論考。

(38) 中島あや子「源氏物語の構想と人物造型」(笠間書院、平成16(2004)年)「末摘花に投影された作者紫式部」

(39) 引用は、岩波文庫『紫式部集』に拠る。実は実践女子大本、陽は陽明文庫本。(40) 今井源衛「王朝文学の研究」(角川書店、昭和45(1970)年)「源氏物語と紫式部集」に指摘がある。

(41) 『枕草子』「物語は」段に挙げられた物語。帚木卷冒頭の「交野の少将」も挙

げられている。紫式部は玉鬘系では前代の物語を念頭に置いて物語作りを試みている傾向がある。

- (42) 引用は、『新大系28 平安私家集』(岩波書店)に拠る。後藤祥子校注。なお太字は久下の所為。

- (43) 伊井春樹・津本信博・新藤協三『公任集全釈』(風間書房、平成元(一九九〇)年)

- (44) 公任は『日本紀略』に拠ると万寿三(一〇三〇)年正月四日に出家する。入山は前年十二月十九日で「今日按察向長谷龍居云々」(小右記)とある。

- (45) 『日本紀略』永延元(九八七)年七月二十一日条に「兵部卿具平親王」とある。なお具平が中務卿になるのは同年九月二十六日条に記されている中務卿兼明親王が薨じて以後のことである。

- (46) 福家俊幸「具平親王家に集う歌人たち―具平親王・公任の贈答歌と『源氏物語』―」(久下編『王朝の歌人たちを考える―交遊の空間』武蔵野書院、平成25(二〇一三)年)

- (47) 引用は、岩波『新大系32』(一二三頁)に拠る。

- (48) この「おなじ心」の発生源について『信明集』の「恋しさは同じ心にあらざとも今宵の月を君見ざらめや」(113)に拠ること久下「後期物語創作の基点―紫式部のメッセージ―」(久下編『源氏以後の物語を考える―継承の構図』武蔵野書院、平成24(二〇一二)年。のち『源氏物語の記憶―時代との交差』武蔵野書院、平成29(二〇一七)年)

- (49) 今井源衛編『源氏物語とその周縁』(和泉書院、平成元(一九九〇)年)「光源氏物語本事」

- (50) 稲賀敬二『源氏物語の研究 物語流通機構論―』(笠間書院、平成5(一九九三)年)「紫式部日記逸文資料」「左衛門督」の「梅の花」の歌―日記の成立と性格をめぐる臆説―。なお稲賀氏は「十一日の暁」の記事も寛弘五(一〇〇八)年五月の記事とする。

- (51) 藤本勝義『源氏物語の人ことば文化』(新典社、平成11(一九九九)年)「紫式部

日記「すきもの」「くひな」段―紫式部の自己主張(一)―は「梅の花の枝」とする。

- (52) 頼通の実弟教通と公任女との結婚は、『御堂関白記』長和元(一〇三三)年四月二十七日条に記されている。いちおうこの時点で公任はミウチ化すると考える。

- (53) 『尊卑分脈』には「寛弘六七廿八薨四十六才」とある。

- (54) 『日記』で清純なイメージを打ち出す頼通像が崩れるとなると、「水鶏」段で式部の部屋の戸をたたいた男を道長と断定できなくなる。

- (55) 引用は、平野由紀子『御堂関白集全釈』(風間書房、平成24(二〇一二)年)。以下、同氏説は同書に拠る。

- (56) 杉谷寿郎『平安私家集研究』(新典社、平成10(一九九八)年)「御堂関白集」は、道長が公任室に宛てた贈歌と解している。

- (57) 森田奈々「御堂関白集の基礎的研究」(お茶の水女子大学「国文」93、平成12(二〇〇〇)年7月)

- (58) 妹尾好信「『御堂関白集』読解考―第三歌群・年次不定詠の部―」(広島大学文学部紀要)60、平成12(二〇〇〇)年12月)

- (59) 加藤静子「『御堂関白集』から照射される『栄花物語』」(都留文科大学研究紀要)76、平成24(二〇一二)年10月)

- (60) 『栄花物語』巻八「はつはな」には原『紫式部日記』から取材したとされている寛弘五(一〇〇八)年五月五日の『法華経』第五巻を講ずる模様が詳しく記述されている。また『紫式部集』にも当日は端午の節供だから菖蒲の根や菖蒲の香にちなむ詠歌や親友少将君との贈答歌等、多くが記されている。ただ注目の頼通の求婚歌は記されていない。なお寛弘五(一〇〇八)年五月五日が『法華経』五巻の日に当たる土御門殿での三十講は、寛弘五(一〇〇八)年以外にはないと笹川博司『紫式部全釈』(風間書房、平成26(二〇一四)年)二二八頁に指摘されている。

- (61) 現存『紫式部日記』の首欠問題については、河内山清彦『紫式部集・紫式部

日記の研究」(桜楓社、昭和55(一九八〇)年)「紫式部日記成立論」等が詳しい。

(62) CD版『新編私家集大成』(エムワイ企画、平成20(二〇〇八)年)「新編補遺」

(63) 久保木氏の判読不能の箇所は□で示してある。加藤氏の前掲注(59)論考では久保木氏が「以下判読不能」とした箇所を春日市道風記念館に於ける平成12(二〇〇〇)年秋の特別展「諸家集の古筆」図録に拠り、「御らんして」以下「ゆゝしのほとたに」とさらに読み込み、以下判読不能とした。

(64) 『源氏物語』梅枝巻にも「正月のつごもりなれば、公私のどやかなるころほひに、薫物合はせたまふ」ともあり、婚儀の時期としてもふさわしいか。

(65) 頼通女寛子について『扶桑略記』永承五(一〇五〇)年十二月二十一日条に「母中務卿具平親王女」とあり、また『尊卑分脈』にも「母具平親王女」と記される。『栄花』(巻三十六「根合」)には寛子の母祇子を倫子に仕える進命婦とし、頼通は具平親王女と彼女の出自を言いなしていたと伝える。つまり祇子は『栄花』の「女宮、三所」つまり隆姫、敦康親王室、嬪子以外の隠し子であったかもしれない。

(66) 福家俊幸『「紫式部日記」に記された縁談——『源氏物語』への回路——』(福家俊幸・久下編『考えるシリーズ①王朝女流日記を考える——追憶の風景』武蔵野書院、平成23(二〇一一年)。なお太字は久下の所為。

(67) 大輔命婦は、源氏の左衛門の乳母の娘で内裏女房であり、父兵部大輔が常陸宮と縁があり、宮邸に出入りしている。

(68) 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」(『國語國文』368、昭和40(一九六五)年4月、のち『源氏物語の方法』桜楓社、昭和44(一九六九)年)

(69) 山本利達「作者の人間理解——末摘花を中心に——」(『源氏物語の探求 第十輯』風間書房、昭和60(一九八五)年)。なお山本説を継ぐ論として末摘花と老女房との関係性を基軸に物語的方法として論じた外山敦子「末摘花は変貌したのか——老女房との関係性から——」(『愛知淑徳大学国語国文』20、平成9(一九九七)年3月)があり(これは以下の本稿における論述に関わる方法)、また光源氏側に視点を置いた

のが末摘花巻で、末摘花側に視点を据えたのが蓬生巻だとする坂本共展「源氏と末摘花」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、平成5(一九九三)年)がある。

(70) 清水好子『源氏物語論』(塙書房、昭和41(一九六六)年)

(71) 斎藤正昭『源氏物語 成立研究』(笠間書院、平成13(二〇〇一)年)「玉鬘十帖の執筆時期——妍子東宮入内における献上本の可能性——」。また尚侍妍子と絡む物語創作を指摘する川島絹江『源氏物語』の源泉と継承』(笠間書院、平成21(二〇〇九)年)「玉鬘十帖の方法と成立——玉鬘の運命と和泉式部、そして妍子——」がある。

〔追記〕

後のことだが道長は三条天皇が、寛仁元(一〇二七)五月に崩御し、その喪中にも拘わらず、道長は娘の寛子(明子所生)と敦明親王との結婚を寛仁元(一〇二七)年十一月に盛大に挙行した。『小右記』寛仁元(一〇二七)年十一月二十二日条にはそのことを非難する記事がみえるが、時の為政者道長にとってはなりふり構わず強引に慣習などを破ることは意に介さない権力があつた。つまり、加藤静子の具平親王薨後の頼通と隆姫との結婚否定説は、必ずしもその結婚が全く閉ざされている訳ではないから、断定的な考察に疑念が入る余地はあろうと思われる。

(くげ ひろとし 本学名誉教授)